



85th JDA Tokyo, 2021

第85回日本皮膚科学会東京支部学術大会

The 85th Annual Meeting of the Tokyo Division of JDA

ランチョンセミナー8

# 皮膚免疫トピックス

座長

天谷 雅行 先生(慶應義塾大学)

佐藤 伸一 先生(東京大学)

演者

門野 岳史 先生(聖マリアンナ医科大学)

「皮膚免疫と皮膚疾患」

多田 弥生 先生(帝京大学)

「皮膚疾患の免疫学的トピックス」

日時

2021年11月14日(日)11:30～12:30

会場

第1会場【京王プラザホテル 5F エミネンスホール】

本セミナーはWEBでのライブ配信もおこないます。

視聴方法は学会ホームページ(<https://jdatokyo85.jp/>)をご覧ください。

NOV

【共催】 第85回日本皮膚科学会東京支部学術大会  
常盤薬品工業株式会社 ノブ事業部

## 皮膚免疫と皮膚疾患

聖マリアンナ医科大学 門野 岳史 先生

皮膚免疫は多くの皮膚疾患に関与し、多様な役割を果たしている。免疫は元来病原体に対して働くものであるが、皮膚において免疫が過剰に働けば、様々な皮膚の炎症疾患や自己免疫疾患につながり、また皮膚における免疫が不十分であると感染症に加えて、腫瘍が生じやすくなる。本セミナーでは、細胞接着因子を切り口として、血球細胞が様々な細胞や組織に接着することが皮膚免疫に如何に大切であるか、また細胞接着因子を介して血球細胞の動きを制御することが、どのように皮膚の炎症や皮膚疾患に関わるかについて述べたい。また、近年腫瘍免疫が脚光を浴びているが、メラノーマを中心として、自己免疫を最小限にしながら、腫瘍免疫を如何に増強させるかについて、最近のトピックスを中心にお話したい。

## 皮膚疾患の免疫学的トピックス

帝京大学 多田 弥生 先生

乾癬においては、基礎研究の進歩および抗体医薬の臨床試験結果から、サイトカインなどの治療標的分子が明らかとなった。実際、その標的分子を抑制すると、皮疹、関節炎に高い効果が認められている。それに続いて、アトピー性皮膚炎でも主に炎症、痒痒で重要と思われる分子を標的とした薬剤が開発され、乾癬同様、臨床試験結果がその標的分子の病態での重要性を示唆する結果となっている。一方で、例えば蕁麻疹で効果を示している抗IgE抗体は、まだ作用機序が十分にわかっていない。このように、新規薬剤の開発が病態の理解に先行することは今後もありうる。抗体医薬やシグナル伝達分子を標的とした低分子化合物の開発に伴い、最終的に当該分子の疾患病態における重要性が実臨床での効果を見て初めて明らかになるという流れは、今後も続くものと思われる。本講演においては、炎症性皮膚疾患を中心に、今後の新規治療薬につながる基礎研究の成果、臨床試験結果を、未来への期待もこめて、概観したい。